

(19)日本国特許庁 (J P)

(12) 公 開 特 許 公 報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開平8-119523

(43)公開日 平成8年(1996)5月14日

(51)Int.Cl.⁶

B 6 5 H 35/07

識別記号

庁内整理番号

H

F I

技術表示箇所

審査請求 未請求 請求項の数3 F D (全 5 頁)

(21)出願番号

特願平6-284394

(22)出願日

平成6年(1994)10月24日

(71)出願人

391048991

仁礼工業株式会社

東京都三鷹市下連雀7丁目1番8号

(72)発明者

仁礼 重信

東京都三鷹市下連雀7丁目1番8号 仁礼工業株式会社内

(72)発明者

白川 裕二

東京都三鷹市下連雀7丁目1番8号 仁礼工業株式会社内

(72)発明者

日高 智春

東京都三鷹市下連雀7丁目1番8号 仁礼工業株式会社内

(74)代理人

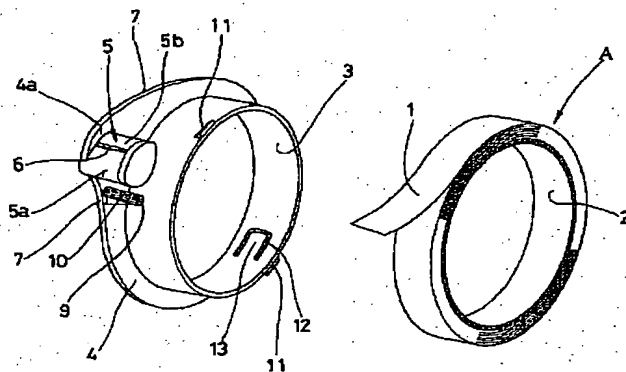
弁理士 瀬川 幹夫

(54)【発明の名称】 テープホルダ

(57)【要約】

【目的】 テープの引き出し量を大きくとることができ、しかも取り扱いも楽にできるテープホルダ

【構成】 スプール3の一端から立ち上げた周壁部4の幅を切断部5に対応する部位を除いて略等しく、切断部5に対応する周壁部4は幅広に形成し、両周壁部4を緩やかな傾斜部7で連結するとともに、周壁部4の内側面からテープ切断部5とスプール3との間に軸状部9を直角に突出し、この軸状部9の表面に凹凸10を形成し、スプール3の他端には少なくとも1個のテープの抜け止め用係合部11を形成した。



1

【特許請求の範囲】

【請求項1】 粘着テープ又は自着性テープのロールを回転自在に支持する短円筒状のスプールと、その一端から立ち上げ形成された周壁部と、周壁部の内側面から直角に突出されたテープ切断部とを備え、

上記周壁部の幅を切断部に対応する部位はやや幅広に、その他の部位は略等しく形成し、上記両部位の周壁部を緩やかな傾斜部で連結するとともに、

上記周壁部の内側面からテープ切断部とスプールとの間に軸状部を直角に突出し、この軸状部の表面に凹凸を形成し、

上記スプールの他端には少なくとも1個のテープの抜け止め用係合部を形成したことを特徴とするテープホルダ。

【請求項2】 前記スプールの一部にはU字形のスリットを形成し、スリットの内側にテープのロールの内周面を弾性的に押圧する押圧片を形成した請求項1記載のテープホルダ。

【請求項3】 前記周壁部のテープ切断部に対応する部位には、ペン立て用の穴が形成された請求項1又は2に記載のテープホルダ。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】 本発明は巻装された粘着テープや自着性テープのロールを保持するためのテープホルダに関する。

【0002】

【従来技術】 一般に、テープホルダは粘着テープを対象としたものが多い。ところが、最近はこの種のテープとして他の物には接着しないが、自己にのみ接着する自着性テープが開発されている。これはポリプロピレンフィルム又はポリエステルフィルムに特殊コーティング加工を施したもので、日本光ファイバー株式会社製で「ベサルテープ」の商標名で販売されている。このような自着性テープにはテープ自身には接着するが、他のものには接着しないという性質があり、つまり対象物に接着しないので対象物が破損することがなく、特に本や雑誌などの印刷物や花束などを結束するのに便利である。

【0003】 ところが、自着性テープは粘着テープのように少しずつカットして使用するものとは異なり、一度にテープを引き出す引き出し量（巻き戻し量）が大きいから、ホルダ自体の形状を工夫する必要があった。

【0004】 また、従来のテープホルダは取り扱いが面倒であった。

【0005】

【発明の目的】 本発明は前記欠点を解消し、テープの引き出し量を大きくとることができ、しかも取り扱いも楽なテープホルダを提供することをその目的とする。

【0006】

【目的を達成するための手段】 前記目的を達成するた

2

め、本発明に係るテープホルダは、粘着テープ又は自着性テープのロールを回転自在に支持する短円筒状のスプールと、その一端から立ち上げ形成された周壁部と、周壁部の内側面から直角に突出されたテープ切断部とを備え、上記周壁部の幅を切断部に対応する部位はやや幅広に、その他の部位は略等しく形成し、上記両部位の周壁部を緩やかな傾斜部で連結するとともに、上記周壁部の内側面からテープ切断部とスプールとの間に軸状部を直角に突出し、この軸状部の表面に凹凸を形成し、上記スプールの他端には少なくとも1個のテープの抜け止め用係合部を形成したことを特徴とする。

【0007】 なお、前記スプールの一部にはU字形のスリットを形成し、スリットの内側にテープのロールの内周面を弾性的に押圧する押圧片を形成するのが好ましい。

【0008】 また、前記周壁部のテープ切断部に対応する部位には、ペン立て用の穴を形成するのがよい。

【0009】

【発明の作用、効果】 本発明によれば、テープのロールを装着するときはその巻き芯をスプールに嵌め込めばよい。ロールがスプールの一端の係合部を越えたとき、ロールの外側は係合部に係合するので、ロールがリールから抜け出すのが防止される。ロールはスプールに嵌込むだけで簡単に装着できる。

【0010】 テープを使用するにあたっては、本などの被結束物を結束する場合のように自着性テープをスプールから比較的長く引き出すときは、通常は片手の親指以外の4本の指をスプールに入れて支持し、テープホルダを被結束物のまわりに回しながらテープを連続的に引き出す。この場合、スプールの一側から立ち上げ形成された周壁部の幅は切断部に対応する部位を除いて略等しく、切断部に対応する周壁部は幅広に形成し、上記両周壁部を緩やかな傾斜部で連結されている。つまり、周壁部は略ドーナツ状に形成されているので、回転したときに周壁部が使用者の手の内側に当たりにくい。したがって、テープホルダを被結束物のまわりに連続的に回転させやすく、テープの引き出しが楽である。

【0011】 また、粘着テープも同じ要領で使用できるが、この場合、テープ切断部で切断後、テープの粘着面を軸状部に当てることにより、粘着面は軸状部に接着するが、軸状部には凹凸部が形成されているので、粘着面はその一部のみが接着するだけであるから、接着力は弱く、テープの先端部は軸状部に良好に保持されるとともに簡単に剥すことができ、便利である。

【0012】 請求項2の発明によれば、切断部で切断されたテープの先端部は軸状部に保持される。そして、ロールの内面を押圧片が弾性的に押圧するから、その摩擦抵抗によりロールは自由回転しにくい。このため、テープの先端部は軸状部に係合した状態で保持され、次の使用時には簡単に掴んで引き出すことができる。

10

20

30

40

50

【0013】また、粘着テープも同じ要領で使用できるが、この場合、テープ切断部で切断後、テープの粘着面を軸状部上に当てることにより、粘着面は軸状部に接着するが、軸状部には凹凸部が形成されているので、粘着面はその一部のみが接着するだけであるから、接着力は弱く、テープの先端部は軸状部上に良好に保持されるとともに簡単に剥すことができ、便利である。

【0014】請求項3の発明によれば、机上にテープホルダを横置きしてそのペン立て用の穴にボールペンや鉛筆を差し込んで立ておくことができるので、非常に便利である。

【0015】

【実施例】図1はテープホルダとテープロールを示すもので、このテープホルダは合成樹脂から構成され、自着性テープ1のロールAの巻き芯2を回転自在に支持する短円筒状のスプール3と、その一端から立ち上げ形成された周壁部4と、周壁部4の内側面から直角に突出されたテープ切断部5とを備えたもので、スプール3の一端からロールAの巻き芯2を嵌込み、スプール3に支持された自着性テープ1を所要の長さだけ引き出してテープ切断部5のカッタ6で切断して使うものである。

【0016】上記周壁部4の幅はテープ切断部5を除いて略等しく、テープ切断部5に対応する周壁部4aは幅広に形成されているとともに、上記両周壁部4は緩やかな傾斜部7で連結され、全体としてドーナツ状に形成されている。

【0017】上記周壁部4の内側面からテープ切断部5とスプール3との間に軸状部9が直角に突出され、その表面には凹凸10が形成されている。

【0018】また、上記スプール3の周壁部4の反対側の端部には2個の係合部11が形成されている。そして、スプール3にはU字形のスリット12が形成されている。そして、スリット12の内側には押圧片13が形成され、図2のように該押圧片13の先端にはスプール3の外周面よりも高く突出した山形凸部14が形成されている。

【0019】さらに、周壁部4の内側面から突出したテープ切断部5はテープの巻き方向に細長に形成され、その軸状部9側の端部5aの断面は半円弧状に形成され、他方の端部5bにはカッタ6が取り付けられている。図3のように、上記端部5bの一端に形成された溝15にはカッタ6が圧入され、反対側の端部5aはローラ状に形成されている。そして、テープ切断部5の端部にはキャップ16が嵌め込まれている。

【0020】テープ切断部5に対応する部位の周壁部4aには、図4に示されるようにペン立て用の穴17が形成されている。

【0021】前記構成のロールAを装着するときは、図5のようにスプール3の一端からロールAの巻き芯2を嵌込む。ロールAがスプール3の一端の係合部11を越

えたとき、ロールAの外側は係合部11に係合するので、ロールAがスプール3から抜け出すのが防止される。ロールAはスプール3に嵌込むだけで簡単に装着できる。

【0022】次に、テープ1を使用するにあたり、図6のように、本などの被結束物18を結束する場合のように比較的長く巻き戻すときは、片手の親指以外の指をスプール3に入れ、親指をロールAの上に当ててテープホルダを支持し、テープホルダを被結束物18のまわりに回しながらテープ1を引き出す。このようにテープホルダを回転させる場合、スプール3の一端から立ち上げ形成された周壁部4は略ドーナツ状に形成されているので、回転したときに使用者の手の内側に当たりにくい。したがって、テープホルダを回転させやすく、テープの引き出しが楽である。

【0023】さらに、親指でロールAが回らないように押えて引き出したテープを被結束物18の回りに回し、テープ切断部5のカッタ6で切断し、その端部をテープの他の部分に押し当てて接着させ、結束作業が完了する。

【0024】ところで、軸状部9はロールAから巻き戻されてテープ切断部5で切断されたテープ1の先端部1aを保持しておくもので、このテープ部分1aは軸上部9に係合してロールAから引き離され、次の使用時に手で簡単に掴むことできる。このように切断されたテープの先端部1aは軸状部9上に保持されるが、ロールAから剥かれた状態になっているので、もしもロールAがスプール3上を回転すると、上記テープの先端部1aは軸状部9から外れてしまう。しかし、ロールAの内面を押圧片13の山形凸部14が弾性的に押圧するから、その摩擦抵抗によりロールAは自由回転しにくい。このため、テープ1の先端部1aは軸状部9に係合した状態で保持され、次の使用時には簡単に掴んで引き出すことができる。

【0025】上記テープホルダは通常の粘着テープにも使用できる。この場合も上述と同じ要領で使用すればよいが、テープ切断部5で切断後、テープ1の粘着面を軸状部9上に当てることにより、図5のように粘着面は軸状部9に接着するが、軸状部9には凹凸10が形成されているので、粘着面はその一部のみが接着するだけであるから、テープ1の端部は軸状部9上に良好に保持されるとともに簡単に剥すことができ、便利である。

【0026】また、テープ切断部5の刃の反対側の端部5aはローラ状に形成されているので、図7のようにこの端部は対象物19の表面にテープ1を密接させて押し付けながら移動させることができるので、片手で接着操作できる。

【0027】さらに、机上にテープホルダを横置きしてそのペン立て用の穴17にボールペンや鉛筆を差し込んで立ておくことができるので、非常に便利である。

5

6

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明に係るテープホルダとテープロールの斜視図

【図2】上記テープホルダの押圧片部分の断面図

【図3】上記テープホルダの使用状態を示す斜視図

【図4】上記テープホルダの平面図

【図5】上記テープホルダにテープロールを装着した状態の斜視図

【図6】自着性テープによる結束態様説明図

【図7】粘着テープの使用の一態様の説明図

【符号の説明】

A ロール

1 自着性テープ

3 スプール

4 周壁部

5 テープ切断部

9 軸状部

10 凹凸

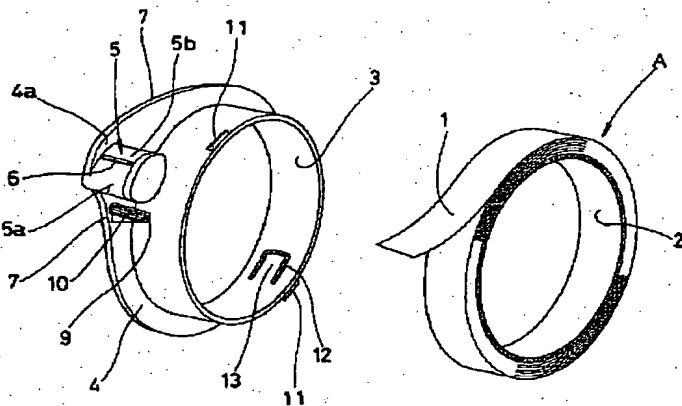
11 係合部

12 スリット

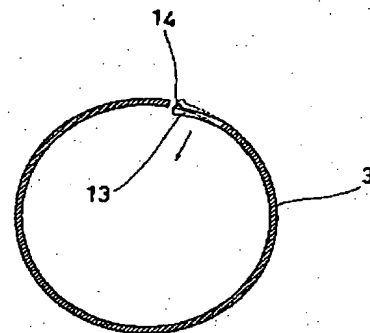
10 13 押圧片

17 ペン立て用の穴

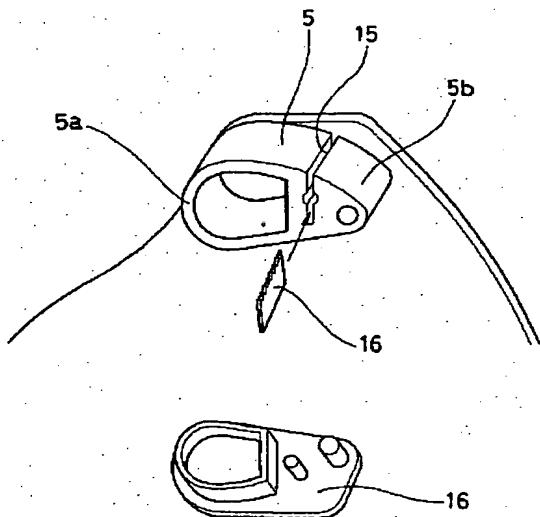
【図1】



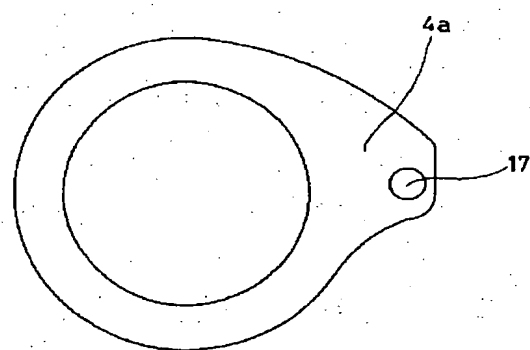
【図2】



【図3】



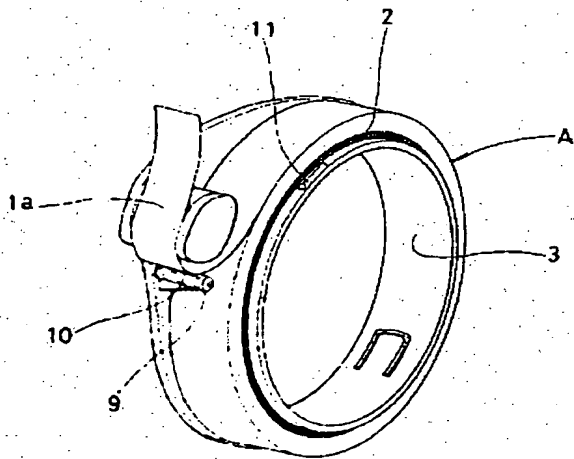
【図4】



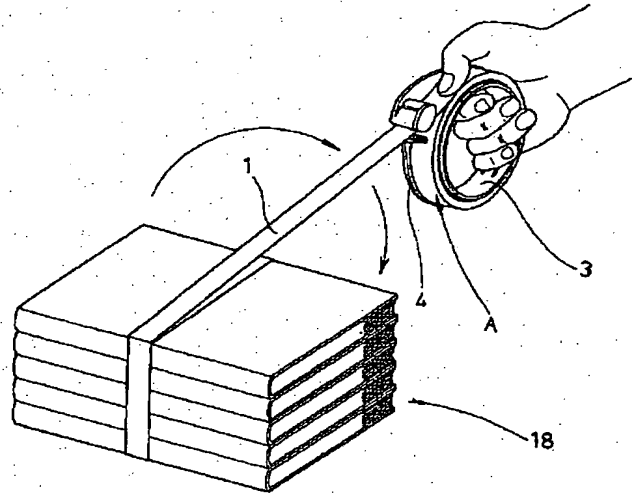
(5)

特開平8-119523

【図5】



【図6】



【図7】

